

## 遠ざかる猿の記憶

二九四

平田昌司

一

元末の戴良（一三一七—一三八三）に、元初の畫家顔輝の「百猿圖」のために作った文がある。文の前半は、畫中に描かれた猿それぞれの姿態、それぞれの數を、「兩腕を木にかけ、あおむいて體を斜めにたつもの一匹、うづくまつて後を見るもの一匹、遊んでいて一緒に木の葉をむしつたり水をすくつて飲むうとしたりつながつたもの五匹」など、韓愈「畫記」にならつて、こまごまと書きあげる。

後半は、この文を作つた經緯の説明に入る。

至正の末年、わたしは海路を船に乗つて南へと歸り、四明〔寧波〕に着いた。わたしを受け入れた主人の夏叔宜兄弟が、この圖を出してわたしに見せてくれた。そこで、もう一度感じるところがあつた。ああ、猿というものは猴と姿が似ており、ふるまいも似ている。けれど、猿はうまれつきの性質が仁に近く、農作物を足で踏みに行ふことはなく、小さな草木を見れば避けて通り、木の實が熟していなければ待つ。猴のうまれつきは、なんでもそれと逆である。逆だと、それはほとんど暴になってしまう。猿が四川に多く分布するのは對して、猴は東部沿海地域ほどたくさんいるところはない。わたしは東部沿海の深い山なみの中に住まいし、猴の暴が厭わしく、猿

の仁を慕っている。以前、船で大海を渡り、淄水まで行き、泰山に登つた。そして巫峽を望み、四川・陝西へと溯つて、猿のすみかを探し、見てみたいと思つていた。けれども、交通が杜絶しており、目的を遂げることはできなかった。四明の地に戻つてから、思いがけずこの圖を見ることができ、感慨をもよおさずいられるだろうか。〔所藏者の夏〕叔宜から借り受けること一月餘り、叔宜は畫に文を題するよう求めてきた。そこで猿のすがたと數を記して返す。畫を見る者が不注意であつたりすると、猿を猴と取り違えるのではないかと懸念される。そこで、猿と猴は外見が同じでも内面がどのよう異なるか、ついでに明らかにした。柔兆敦牂〔丙午、至正二十六年〕のとし、よき月のついたちに記す。<sup>②</sup>

猿とはテナガザルなど夫婦と子だけの小さな群で暮らす大型で手足の長い種類、猴はアカゲザルなど群で生活し田畑を荒らす種類をさすらしい。<sup>③</sup>ここに引いた部分は、ほとんど柳宗元「憎王孫文（王孫を憎む文）」（『柳河東先生集』卷十八）を踏まえる。<sup>④</sup>柳宗元が記したのは、仁・讓・孝・慈の美德を備えた猿（猴）が、農作物を踏むことなく、木の實が熟さないうちは見守るだけで手を出さず、小さな草木でも避けて歩くのに對して、王孫（猴）は農作物を荒らし、熟していない木の實でも食べ、小さな草木を折つてしまうなど悪事ばかりはたらく、ということであつた。戴良

「百猿圖記」は、韓愈と柳宗元の二篇の文を模倣し、接ぎ合わせた畫賛だということになる。

ところで、柳宗元「憎王孫文」のもつ寓意性は、北宋の晁補之（一〇五三—一一二〇）が「離騷では虬・龍・鸞・鳳が君子を寓意し、不快な鳥・惡臭を放つものが言葉巧みに中傷する人物をさしている。柳宗元はそれにならった」、南宋の黃唐（寧宗の時の人）が「猿は君子をたとえ、王孫は小人をたとえる。君子を登用して小人を遠ざけるようにとの氣持が出ている」と説明を加えて以來、周知の事實だと考えていい。したがって、戴良「百猿圖記」を目にして、ただちになんらかの寓意の存在を感じとれない讀者はいなかつたであろう。清代のはじめ、黃宗羲（一六一〇—一六九五）は、戴良の數多い作品の中からこの「百猿圖記」だけを『明文授讀』卷四十一に「百猿圖序」と題して採録、以下の評を加えた。

これは猿を元にたとえ、猴を明にたとえたものだ。このころ元はまだ四川を領有しており、明が興つたのは東部沿海地域だった。そのため、このように言う。

「猿、元」は『中原音韻』先天韻、現代金華方言いずれにおいても同音である。さらに「楚人は沐猴にして冠す」まで連想させる「猴」で朱元璋の明を罵るとは、あまりにあからさまではないだろうか。なにしろ、文中には「柔兆敦牂」丙午、至正二十六年の作と書いているけれども、戴殿江の「年譜」によれば、『四庫全書』本の巻首、戴殿江の年譜の至正二十七年の條には、「百猿圖記」は「おそらく洪武の改元の後で作られたもので、猿に託して元を思う氣持だが、非常にはつきりしている」と推定されているからである。明が四川を占領できたのは、洪武四年秋七月であつた（『明史』太祖紀二）。

## 二

戴良は、なぜ「百猿圖記」を書いたか。まず戴良の傳を簡單に見ておきたい。かれの詩文に記された年月は、ときどき意識的に改竄されていると指摘されているため、以下は主として文淵閣『四庫全書』本に収める戴殿江の年譜の考證に従う。

戴良は、字が叔能、元の江浙行省婺州路浦江（浙江省金华市浦江縣）の人である。學問を吳萊・柳貫・黃潛から授けられた。先輩・友人として親しく交わつたのは陳樵（一二七八—一三六五）、胡翰（一三〇七—一三八二）、宋濂（一二三〇—一三八二）、吳深（一二三二—一三四二）、吳沈（一三三三—一三八六）兄弟、王禕（一二三二—一三七三）らであり、元末金華學術の中心人物をほぼ網羅する。

至正二十一年（一二六二）、戴良は元の順帝から淮南江北等處行中書省儒學提舉に任じられた。同二十三年（一二六三）には、金華の兵亂を避けて蘇州の張士誠のもとに赴き、以後三年を過ごす。至正二十六年（一二六六）秋、張士誠の命を奉じて定海から海路山東に至り、元のココテムル（擴廓帖木兒、本名は王保保）に出兵を求めようとしたが、戰亂のため昌樂（山東省）から先に進めない。使命を果たせぬまま、翌二十七年秋に再び海を渡つて鄞縣（寧波）に戻つた。同年、張士誠が滅び、元が大都から漠北に退いてしまつてからは、九靈山に隱棲した。その詩については、「戴良は、元が滅びてから、故國・舊君によせる思いを、しばしば詩作にあらわしている」（顧嗣立『元詩選』二集）、「元が亡んでから、戴良と王逢だけは舊主を忘れることがなかった。その思いがいつも詩に出ていたので、とうとうまつとうな死にかたがでできなかった」（『明史』文苑傳一・戴良）などの評語がある。下に「懷宋庸菴（宋庸菴—餘姚の宋禧—を懷う）」を擧げて例としたい。

「荒れた舊都を詠んだ」「麥秀」の詩を歌う聲は途切れ もう髪も白くなつたのに

人にあうたび 「暴虐な秦に滅ぼされた」東周（元朝）の逸事を語り聞かせている

戦塵はいつまでも續き 年老いた身ばかりが生き残つた

草も木も枯れ萎れた かつてあつた國の衰えを悲しむかのように

祖逖は國家の危機を思い 「失地回復を誓つて」かじを叩いたが ついに果たせず

王粲がさまざまな困難に直面してできたのは 「登樓賦」を作るこ  
とだけ

どうか 麒麟にまたがった（普化天尊のような）あなたの後を追  
髪を振り亂し ともに無限をめざす旅に出られたら<sup>⑫</sup>

祖逖は洪武八年に卒したココテムルを、王粲は遺民となつた元の文人たちを投影するのであろう。末二句は、元の滅亡後、宋禧が一時期道士になつたことを示すのかも知れない。

こうした詩作から見たところ、「百猿圖」の記のいささか露骨過ぎる寓意は、いかにも戴良らしい。より晩年の文では、玄黙闍茂つまり洪武十五年（一三八二）壬戌のとし五月既望に作つた「天機流動軒巻後」（四庫全書本『九靈山房集補編』巻下）が、元の淮南行省左丞として陳友諒の軍と戦つて死んだ余闕（一三〇三—一三五八）、明の太祖に仕えて不幸な死をとげた宋濂・王禕・胡翰を悼み、肅殺の氣に満ちている。<sup>⑬</sup>

洪武十六年（一三八三）、戴良は、明の太祖によって應天府に召しだされ、出仕を求められたが従わず、自殺あるいは獄死したらしい。<sup>⑭</sup> もつとも、その死の具體的状況について、子孫や知友は語るのを長く諱んだ。

死後二十八年たつた永樂六年（一四〇八）執筆の趙友同「故九齡先生戴公墓誌銘」は、應天府で「微疾」にかかり、端坐して「寓舎」で卒したとだけ傳える。<sup>⑮</sup>

戴良の文集は、洪武年間に刊行された。陸心源『皕宋樓藏書志』巻一百八・同『儀顧堂續跋』巻十三・傅增湘『藏園群書經眼錄』巻十五に著録するものがそれで、明代の刊行であるにも関わらず、元朝に言及するときは改行や空格があると記されている。<sup>⑯</sup>

## 三

やはり元の再興を願いつづけていたウイグル詩人丁鶴年（一三三五—一四二四）のために戴良が書いた「鶴年吟藁序」は、「かつて周朝の興起にあたり、その發祥地は西北地方であつた。……わが元朝が天命を受けたときも、西北地方から興起した。……〔馬祖常・薩都刺・余闕の〕三人の方は、いずれも西北の遠國に住まいし、『詩經』の世界で最も邊境の〕幽や秦から何萬里離れているか分からないほどなのに、詩を作れば中國の古典時代の詩人たちの遺風さえある。ここからわが王朝の教化がひろく行われ、人びとの氣風を大いに變えたこと、周の盛期でもこれほどではないと見て取れる」として、元を周と對等以上の存在として扱う。また、元が崩壊する過程で、王朝に殉じて死んだ士大夫の數も少なくない。<sup>⑰</sup> モンゴル人の王朝であるはずの元に自らのアイデンティティをもち、明を嫌つた元末明初の知識人は、むしろ多數派を占めていたかも知れないという印象さえ受ける。

戴良が死んだ翌々年の洪武十八年から洪武十九年（一三八五—一三八六）にかけて明の太祖が刊行させた、『御製大誥』『御製大誥續編』『御製大誥三編』の血なまぐさい文章の中で、「えびすの元が天下を統治し、われわ

れの精神も生活態度もその影響を受けること九十三年に及んだ。思想的に確かでない者たちは、「こつそりと〔元のやりかたに〕従つてふるまい、朕がことばを盡くし、心を碎いても、どうしても改めさせることができない。ああ、難しいことだ」(『御製大誥』卷二「胡元制治」、あるいは「えびすの元が、夷の精神をもつて政治體制を作つてから、古代の聖王たちの教えや中華の精神は全く地をはらい、人びとの生活態度は一層だらしなくなつてしまつたのは慨嘆にたえない」(『御製大誥三編』後序)と執拗な憤懣がもたらされている異常さからも、建國二十年近くを経てなお反抗の不安を解消できない、朱元璋の焦燥を讀みとることができる。

太祖朱元璋がいかに強くモンゴル人の政治體制を否定しても、元朝の實績を肯定する議論は明末清初までずっと残つた。しばしば見いだされる類型は、モンゴル人による中國支配、あるいは家族倫理のモンゴル化を否定しつつ、元代の經濟的・文化的な繁榮とおおらかさを肯定する言説である。

①曾鶴齡(一三三三—一四四一、江西泰和の人)「復本堂記」

元が天下を保つた期間は百年近く、國內は富み榮えて、みなに充分なものがゆきわたり、人びとは古い死ぬまで戦いを經驗することがなく、ほとんど太平の時代だつたと言える。ただ胡の習慣にこだわり、堯舜や三代の聖人の教えを修めなかつた。誰もそのことを批判しなかつたので、三綱五常の道德は滅びそうな状態に至つた。<sup>②</sup>

②李開先(一五〇二—一五六八、山東章丘の人)「西野春遊詞序」

詞〔元曲をさす〕は金に始まり、元に榮えた。元代には邊境の防備がなく、租税が軽くて衣食が足りていた。衣食が足りていけば、詩歌が榮える。楽しい氣持ちであれば歌が口から出て、長いものが套數、短いものが小令となつた。傳奇・戲曲は、こうして廣がり

持つてよりどころとできるものとなつた。穆玄菴(穆孔暉(一四七九—一五三九、山東堂邑の人)が「胡の政治だからと言つて低く評價してはならない」と言つたのも、天下の公論である。<sup>③</sup>

③王夫之(一六一九—一六九二、湖南衡陽の人)『宋論』卷二

蒙古は〔異民族が中國全土を支配するという、まるで〕天を支える綱を断ち切るようなことをしたのに、浙江・江蘇南部の學藝は〔元代の〕末期に繁榮し、劉基・宋濂・章溢・陶安はそれをよりどころに明一代の安定をもたらした。<sup>④</sup>

④李光地(一六四三—一七二八、福建安溪の人)『榕村語錄』卷二十一

元代、人びとは一般にひたすら踊りや歌を樂しみ、仕事にいそむことがなかつた。明の太祖は市中に望樓を立て、兵士にその上で監視させ、音樂・飲酒・賭博をする者が「たてる音や聲が」聞こえるとただちに捕縛連行、望樓の上で逆さ吊りにして水を飲ませると三日で死んだ。規則の定めかたが厳しすぎるとはいえ、だらけきつた氣分を引き締めようという心構えのほどは確かなみなみならぬもので、「『孟子』梁惠王下に」「ひとりでもルールを無視するものがいれば、武王はそのことを恥じた」という雰圍氣さえただよつている。そうでなければ、天下は落ち着き、「遊ぶことが」社會通念化してから長いというのに、どうしてわざわざ怠け者たちに「前の元の時代はゆとりがあつた」と感じさせるようなことをするものか。<sup>⑤</sup>

もちろん、こうしたことばを全て額面どおりに受け取つてよいかどうかは疑問である。穆孔暉は、宦官劉瑾に憎まれて翰林院を追われ、李開先は嘉靖二十年(一五四二)に内閣の夏言を彈劾して免職になつている。元代には軍事負擔が不要だつたこと、租税が軽かつたこと、かれらがそうした事實を肯定的に語るの、政治の腐敗した明代の状況に向けられ

た、屈折した批判としてでもあるからだ。<sup>②</sup>しかし、華夷を峻別しようとする王夫之でさえ——一國の邊境で文化が繁榮する場合があるという文脈の中ではあるが——元朝支配下の江蘇・浙江で高い水準の學藝が維持されていた事實を認めざるを得なかったのである。

#### 四

明の崇禎帝が自殺して十年が経過した順治十年（一六五三）、黄宗羲は民族主義を色濃く反映させた『留書』<sup>③</sup>を著す。中華と夷狄を峻別しようとするその内容には、元から明への交替を論じて、元を否定し、「太祖が蒙古の風俗を一扫して中華の舊を回復されたのは、中華の本來の血統が繼がれたことである。……虎が獵師に殺された。僧道男女がこれを將軍と勘違いしていて號哭している。獵師に「何という無知。生きていた時は虎に食われ、死んでも虎に使われている。なぜ號哭する必要などあるのか」といわれて、やつと眞實が理解できるのに同じである。元を王朝として認めようというなら、これと全く同じではないのか」と説くくだりが含まれている。

その一方で、遠ざかる元への思いを寄せた「百猿圖」の記を『明文授讀』に収め、評語と詳細な圈點を加える黄宗羲が、「號哭」する戴良へ向けたまなざしは、どことなくあたたかい。全祖望（一七〇五—一七五五）「海巢記」が引く黄宗羲のことば、

宋末・元末の人物は、いずれも天地の根本の氣のあらわれである。ただ、ひとつは陽が陰にさえぎられて出ることができず、その音は「『易』の八卦の震のように」雷となり、ひとつは陰が陽にさえぎられて入ることができず、その音は「『易』の八卦の巽のように」風と

なった。謝翱『晞髮集』・林景熙『白石樵唱集』のうたは陽の氣である。むりやりに元によって抑えつけられ、憤りに満ちてそのはけ口がなかった。百年もたたないうちに、太祖皇帝がその雷を解放してやった。丁鶴年・戴良諸氏のうたは陰の氣である。明のふたつ重なった陽の氣に會つて、雷となることができず、『易』の蠱の卦で「上から艮の山に抑えつけられた下の巽の」風のように、長くもたずに消えてしまった。<sup>④</sup>

にも、戴良の「風」への共感があるだろう。黄宗羲が明代散文選集『明文案』の編纂を始めたのは、南明が滅んだ康熙元年（二六六二）から六年を経た康熙七年（二六六八）。『明文案』二百十七卷が完成したのは康熙十四年（二六七五）。『明文海』四百八十卷へと増補され、『明文授讀』六十卷が編まれたのはさらにその後である。<sup>⑤</sup>『留書』から『明文授讀』に至る二十年以上の間の黄宗羲自身の思想の變化も否定はできない。ただし、それ以外に、順治六年（二四四九）の渡海と日本乞師失敗、順治十八年（一六六二）の魯王死没、といった記憶を深くとどめていた黄宗羲は、海難の危険を冒しつつココテムルに出兵を求めて果たせず、亡國のあとは「麥秀」のうたを口ずさみつづけた戴良、かれが遠ざかりゆく元への思いを寄せた「百猿圖」の記に、心ひかれたのではなかったか。それゆえにこそ、明の粗暴苛虐を非難したこの文章を、趣旨がきちんと讀み取れるような評をていねいに加えたうえで、『明文授讀』の中に置いたのではなかったか。

博覽の黄宗羲は、明の太祖の統治下で死んだ浙江の知識人たちの事跡も、『明文授讀』に収められた奏疏を残して處刑された人びとのことも、モンゴル人の統治を追懐した明人たちのことも、熟知していた。北方異民族の中國支配を西周の盛期に比して稱えた戴良のことばに似た事態が

再び出現してしまうかも知れないことを、遺民として生きつつ、黄宗羲は豫期していたかも知れない。

## 注

- ① 明正統刊本『九靈山房集』卷二十(四部叢刊初編縮本一四五頁)では「百猿圖」と題するが、卷十五のまえに置かれた目録では「百猿圖記」(一〇三頁)。文淵閣四庫全書本『九靈山房集』卷二十(臺灣商務印書館影印本第一一九冊四八六―四八七頁)は「百猿圖記」、黄宗羲『明文授讀』卷四十一(東京・汲古書院、一九七三年、九一三―九一四頁)は「百猿圖序」。
- ② 「至正季歲、予附海舟南還、至四明。館人夏叔宜兄弟出其圖以示予。於是重有所感矣。嗟乎、猿之與猴、其形相近也、其舉動相若也。然猿之性類乎仁、遇稼穡不踐踏、『明文授讀』作蹈、見小草木必環之以行、木實未熟則守之。猴之為性、恆、『明文授讀』作則」反是。反是、則幾於「『明文授讀』作于」暴矣。猿多產之於西、『明文授讀』無之字、於作于、西作四」川、而猴莫盛於「『明文授讀』作夫」東海。予居東海萬山中、厭猴之暴、而慕夫猿之仁也。嘗「『明文授讀』作常」杭巨海、抵淄水、登泰山、以望巫峽、遡川陝、將求猿之所在而寓目焉。然道路阻絕、不果也。及還四明、乃得是圖而觀之、能不有感「『明文授讀』作慨」乎。遂從叔宜假之、留月餘。叔宜請予題其上、故為記「『明文授讀』作計」其形狀與「『明文授讀』與下有其字」數而歸之。且懼觀者之不審也、或至目猴以為猴、因併著其外同而內異者如此。柔兆敦牂之歲良月朔日記。」(四部叢刊初編縮本を底本とした。)
- ③ 『說文解字注』第十三篇上「猿」(經韻樓本頁六十)、第十篇上「猴」(同頁三十五)。
- ④ 「憎王孫文」の寓意については、清水茂『唐宋八家文(上)』(東京・朝日新聞社、一九六六年)の三二―三三頁、松本肇『柳宗元研究』(東京・創文社、二〇〇〇年)の二二―二四頁、關聯する中國語の文獻は非常に多いので、少し傾向の変わった解釋を示す章士釗『柳文指要』卷十

八(北京・中華書局、一九七一年)のみを擧げておく。

⑤ 朱熹『楚辭後語』卷五「晁氏曰……離騷以虬龍鸞鳳託君子、以惡禽臭物指讒佞、而宗元放焉。」

⑥ 『新刊五百家註音辯唐柳先生文集』卷十八・『新刊增廣百家詳補註唐柳先生文』卷十八などが、黃唐の語として「以猿喻君子、王孫喻小人。有意乎用君子而去小人也」を引く。

⑦ 「此以猿比元、以猴比明。此時元尚有四川、而明之發跡在東海故云。」

⑧ 曹志耘『金華方言詞典』、南京・江蘇教育出版社、一九九六年。『事林廣記』の「浙音」だと、「園(中古音で猿と同音)」と「元」は音が異なる。拙稿『事林廣記』音譜類「辨字差殊」條試釋(『漢語史學報』第五輯、上海教育出版社、二〇〇五年)の(13)。

⑨ 『九靈山房集』卷十四「贈蒲察鎮撫詩序」(四部叢刊初編縮本九四頁)。

⑩ 「叔能自元亡後、故國舊君之思、往往見於篇什。」

⑪ 「元亡後、惟良與王逢不忘故主、每形於歌詩、故卒不獲其死云。」(北京・中華書局、七三二頁)王逢の傳は、戴良の後に附記されている。

⑫ 「麥秀歌殘已白頭、逢人猶自說東周。風塵洞洞遺黎老、草木凋傷故國秋。祖逖念時空擊楫、仲宣多難但登樓。何當去逐騎麟客、被髮同爲汗漫遊。」(『九靈山房集』卷二十五、四部叢刊初編縮本一八一頁)

⑬ 王禕につき、戴良が「斥死北地」と記するのは、他史料と一致しない。王禕殺害の具體的経緯が判明したのは死後九年を経た洪武十五年のこと(鄭濟「故翰林待制華川先生王公行狀」、『皇明文衡』卷六十二)、戴良が「天機流動軒卷後」を書いた時点ではまだ知られていなかったのだから、「斥死」という表現には、殺害されるかも知れないことを計算の上で死地に赴かせた、という非難が込められていると思われる。

⑭ 獄死と傳えるのは朱彝尊「戴良傳」(『曝書亭集』卷六十三、四部叢刊初編縮本四八〇頁)。

⑮ 『九靈山房集』卷三十(四部叢刊初編縮本二一八頁)。

⑯ 靜嘉堂文庫本は未見。洪武刊本の「提行空格」は、傳增湘の『九靈山房集』清傳寫明正統刊本の解説による推定。

⑰ 「昔者成周之興、肇自西北。……我元受命、亦由西北而興。……此三公者、皆居西北之遠國、其去幽秦蓋不知幾萬里、而其爲詩乃有中國古作

者之遺風。亦足以見我朝王化之大行、民俗之丕變、雖成周之盛莫及也。」

〔『九靈山房集』卷二十一、四部叢刊初編縮本一四八頁〕

⑮ 趙翼『廿二史劄記』卷三十一「元末殉難者多進士」。

⑯ 「胡元之治天下、風移俗變、九十三年矣。無志之徒、竊效而爲之、雖朕竭語言、盡心力、終歲不能化矣。嗚呼艱哉。」〔『皇明制書（上）』、東京・古典研究會、三五頁〕

⑰ 「胡元以夷風制治、先王之教、華夏之風、於是掃蕩無餘、民俗愈偷、可勝歎哉。」〔『皇明制書（上）』、一五三頁〕

⑱ 「元有天下幾百年、海內富庶、人人足給、民至老死不識兵革、庶幾太康。而獨狃於胡風、不修堯舜三代之教、人不相非、以至綱常淪斃。」〔『皇明文衡』卷三十六、四部叢刊初編縮本三〇三頁〕

⑲ 「詞肇於金、而盛於元。元不成邊、賦稅輕而衣食足、衣食足而歌詠作。樂於心而聲於口、長之為套、短之為令、傳奇戲文、於是乎侈而可準矣。穆玄菴謂：不可以胡政而少之、亦天下之公言也。」〔『李開先集（上）』、北京・中華書局、一九五九年、三三四—三三五頁。穆孔暉の語は出處未詳。『四庫全書存目叢書』本の『大學千慮』には見えない。〕

⑳ 「蒙古決裂天維、而兩浙三吳文章盛於晚季。劉宋章陶、藉之以開一代之治。」〔北京・中華書局、一九六四年、三八頁〕

㉑ 「元時、人多恆舞酣歌、不事生產。明太祖于中街立高樓、令卒偵望其上、聞有絃管飲博者、卽縛至、倒懸樓上、飲水、三日而死。雖立法太嚴、然所以激厲頹靡處、志氣規模果不尋常、竟有「一人橫行、武王恥之」之意。不然、天下已定、習俗已久、何苦使偷惰者反有故元寬大之思。」〔北京・中華書局、一九九五年、四〇二頁〕

⑳ 黃宗羲『明儒學案』卷二十九。

㉑ 岩城秀夫『中國古典劇の研究』（創文社、一九八六年）第四部第一章「李開先」。

㉒ つけ加えておけば、自らの王朝の正統的な言説が包み隠している胡散臭さを眺めやる視線の存在こそ、明代の特徴であり魅力であるかも知れない。

㉓ 『黃宗羲全集（十一）』、杭州：浙江古籍出版社、一九九三年、一一—四頁。

㉔ 小野和子『留書』の思想（岩見宏・谷口規矩雄編『明末清初期の研究』、京都大學人文科學研究所、一九八九年、五〇三—五四五頁）の五三—六頁による。原文は『留書』「史」に見える（『黃宗羲全集（十一）』、一—三頁）。

㉕ 「梨洲黃氏論宋元二季之人物、以為皆天地之元氣。顧一如陽之過於陰而不得出、其聲為雷。一如陰之過於陽而不得入、其聲為風。『晞髮』「白石」之吟、陽氣也。強壓於元、憤盈而無以自洩、未百年而高皇帝發其迅雷。丁戴諸公之吟、陰氣也。臨以明之重陽、故不能為雷、而如蟲之風、不久而散。」〔『鮎埼亭集』外編卷十八、四部叢刊初編縮本七〇五頁〕

㉖ 都留春雄『明文授讀』解題（『明文授讀（上）』、七一—一二頁）、黃百家『明文授讀序』。

㉗ 前掲小野論文の注（27）を参照。

（京都大學大學院教授）